



長谷川潔から岩田榮吉へ 静寂の形象 見どころ紹介

当館は現在、新型コロナウィルス感染拡大防止のため臨時休館中です。

2020年4月18日（土）開始の予定だった「長谷川潔から岩田榮吉へ／静寂の形象」も、準備を完了したものの、開始のめどは立っておりません。そこで、開始を心待ちにしている皆様に、あらかじめこの展示の見どころをご案内したいと思います。



Prologue：展示会場に入る前に

エントランス脇に、本展のバナー広告を掲げました。

もうここから展示の始まりです。上部の人形とその右上に見える鳥の形をしたオブジェは、本展の「メインビジュアル」である岩田榮吉の作品《人形と鳥》の一部なのです。後ほどゆっくりご覧いただくとして、この鳥と人形が、長谷川潔と岩田榮吉を表しています。



それでは展示会場に入りていきましょう。入口の扉を開けると、すぐに本展のタイトルが見えます。

ところで皆さんには展覧会場に入ったらまずどちらに進むでしょうか？もちろん会場の都合などで一様ではありませんが、一般に洋画系は時計回り、日本画系は反時計回りが多いようです。文書が横書きなら左から、縦書きなら右からであるのと同じですね。本展も時計回りに見ていただくことを前提にしていますので、まずは左から見始めます。



入口すぐ左の最初のパネルは、この展示についての概要です。タイトルの「長谷川潔から岩田栄吉へ—静寂の形象（かたち）」の意味するところ、全体の構成などを解説しています。単なるご挨拶に留まるものではありませんので、ぜひご一読ください。

「長谷川潔から岩田栄吉へ—静寂の形象」
展示について

長谷川潔両面では、テープを差し替えた角度からメインフレーム作家百瀬栄吉の作品を二枚おいて奉りました。今回の展示では、洋画の前例が復活後まもなくその知識を得、生前にわざと私印した絵版画家・井口川彌三郎(1891年-1980年)との接觸の本題に、両者の藝術世界を通じて重きが置かれた「静寂の形象（かたち）」を辿ることとしたのです。

岩田が賛同を得た1956年当時、井口川は既に古い絵版画の技法である「マニエール・リード（メゾチント）」をやがてのぞいて製造せ、いよいよその世界観を反映した藝術家に身をこなしていた。繊細な墨刷りを柱たるテープ、繊細な墨刷りをうながしたオブジェ、色彩を諦め表現を和らげた織物…岩田が導いたことは豊富に語れません。

そして何より印象が残されたのは、岩田の作品に見られる「静けさ」とそこから和風見えある繊細な藝術家の生き方だったのでないでしょうか。この静けさはただ無言の休憩というばかりではなく、また豊かな優雅美を發しているでもない、といつて美しい光景でもない、諷刺した書きに通じたまさに「静寂」の實質なのです。

紹介されるなり、岩田は藝術の道に進みませんでした。しかししながら、岩田の藝術家を私生活面でも全くつぶすんだとの大きさは、岩田の作品に現れています。展示は、井口川彌三郎の各種時代の作品、岩田の藝術制作、および長谷川と岩田に共通するモーティーヴについての事例から構成されました。お楽しみいただければ幸いです。

2020年6月1日
井口川彌三郎
井口川彌三郎

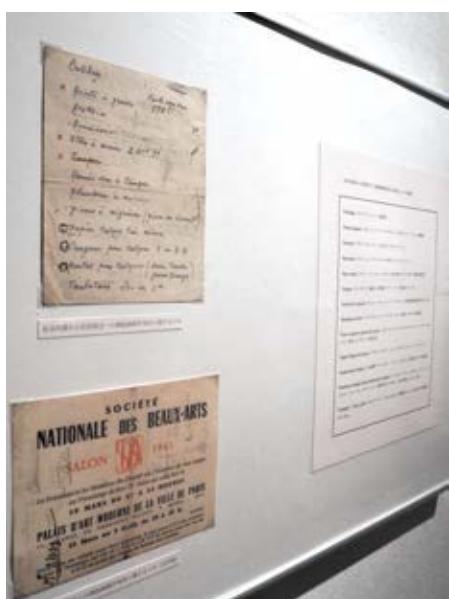
第1部：長谷川潔の版画

第1部は「長谷川潔の版画」。長谷川潔といえば、漆黒の表現が独特の銅版画技法「マニエール・ノワール」による、物語性に富む静物画が有名ですが、そこに到達するまでをそれぞれ特徴的な作品で辿ります。なお、今回の展示には、銅版画の制作にともなう様々な用語が出てきますが、会場で配布する展示目録の裏面に用語解説を記載しましたので、そちらを参照しながらご観覧いただくことができます。



第2部：長谷川の期待

続く第2部は「長谷川の期待」。1958年、自らの継承者を求める67歳の長谷川と、今後の画業展開を模索する29歳の岩田は、パリで出会います。長谷川が岩田に渡した銅版画制作用具のメモ、岩田の銅版画試作作品と原版、そして避暑先での歓談情景写真などに二人の交流の一端を垣間見ることができます。



第3部：モチーフと作例

第3部は「モチーフと作例」。静物画の形をして実は思想をあらわしている…という長谷川と、その長谷川に学んだ岩田には共通するモチーフがあります。その中からまず「鳥」を取り上げます。



ここで本展の「メインビジュアル」、長谷川の《小鳥と二つの枯葉》、岩田の《人形と鳥》が登場します。

ほかにも「人形」、「彫像」、「レース」、「球体・ガラス球」のモチーフを取上げ、それぞれの作品をモチーフごとに並べてご鑑賞いただけます。

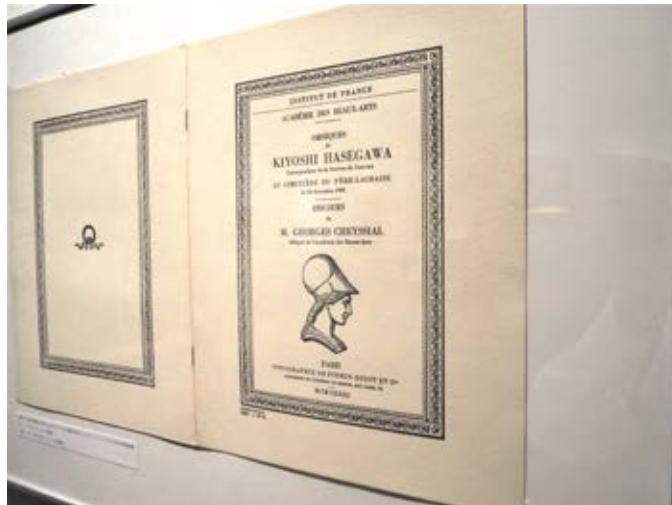
第4部：晩年の長谷川潔と岩田

最終の第4部は「晩年の長谷川潔と岩田」。

結局銅版画の道には進まなかつたものの、岩田は終生長谷川を敬愛し、私生活面での支えともなりました。岩田は、フランスでの長谷川追悼展実現にも大きな役割を果たし、自らの画業も円熟期にさしかかった矢先、病を得て53歳の若さで長谷川の後を追いました。

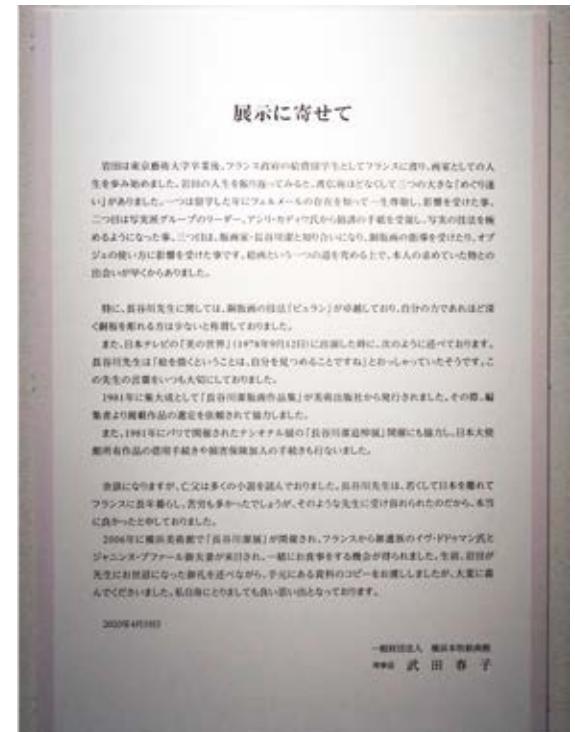


晩年の長谷川と岩田の写真、長谷川の葬儀に際しての弔辞表紙、追悼展実現への事務文書などのほか、岩田の代表作（トロンプルイユ・複製）などをご覧いただけます。



そして本展の最後に、岩田の姪にあたる当館理事長の「展示に寄せて」をご覧ください。長谷川のフランス側ご遺族とのエピソードなどを紹介しております。

以上をご覧いただく際の参考として、世界の出来事と長谷川・岩田の歩みを年表にまとめました。その時代背景と対比しつつ、あらためて両者の足跡と作品をご理解いただくうえで、よい手がかりになるものと思います。



世界が平穏を取り戻し、皆様が本展にお運びくださいまして以上の見どころの作品を実際にゆっくりとご覧いただける日が遠からず来ますよう、心より願っております。